

多様で複雑な聴覚障害の問題を通して知識と社会を結び付けられる人材育成を目指して —平成26年度金沢大学COC事業 地域志向教育研究費「推薦型」の報告—

能登谷晶子, 原田 浩美*, 橋本かほる**, 砂原 伸行***, 横川 正美***

KEY WORDS

hearing disorders, center of community work, connection knowledge in university with Ishikawa area,
human resources, connection students with Ishikawa area

はじめに

文部科学省(以下、文科省)による「地(知)の拠点整備事業(大学Center Of Community;COC事業)」は、大学等が自治体と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・地域貢献を支援して、課題解決に資する様々な人材や情報・技術が集まる、地域コミュニティの中核的存在としての大学の機能強化を図るとしている。文科省のこの事業に、金沢大学では「地域の感性を備えた人材を育て社会を繋ぐ『地(知)』の拠点」を事業名称として掲げ、著者らは平成26年に採択されたので、活動報告と次年度の計画も述べる。

当初の事業規模は、まず聴覚障害に対する基本的な知識を医学的側面、訓練内容、聴覚障害児を抱える親などから年6回を目標に得ることにした。次に、能登・金沢・南加賀地区で、聴覚障害で学童以降の人からコミュニケーション障害について聞く。さらに、現在訓練中の親と、先輩親との交流会に参加する。先輩親が後輩の親に自らの体験談を語るという従来型だけでなく、先輩親自身がわが子の訓練中のビデオを著者らが編集して、先輩の親自身が回想しやすい情報を提供するとしていた。しかし、今回は医学的な基礎知識を学生達に提供することと、現在訓練中の親子と保健学類作業療法専攻学生の交流を2回実施したのみとなった。

研究費の目的

金沢大学では上記の事業名を掲げ、1)地域のリーダーとなる能力を備えた人材育成、2)地域を志向した研究の推進と成果の社会還元、3)地域社会が求める多様な「学び」の提供、の3つの事業が推進されている。本事業で対象とする“地域”とは「能登・金沢・南加賀」であるが、

石川県全域への波及についても考慮すべきとされている。

本研究では多様で複雑な多くの問題を抱える「聴覚障害」に焦点をあて、知識と社会を結び付けられる人材の育成を図ることを目的とした。聴覚障害を取り上げた理由は、以下のとおりである。

聴覚障害は高度医療の発達で0歳代から発見されるようになり、聴覚障害児は数十年前と比べ、飛躍的に高い言語力を獲得・維持することができるようになった^{1,2)}。一方、当該申請者らによる障害を持つ子の親の自己効力感に関する研究では、親の思いはさまざまであることも判明してきた³⁾。その1つとして、小学校就学を境に、急激に親の障害への関心が薄らぐ傾向を示している。それは、幼児期には同障を持つ患者会に積極的にあったが、子どもの就学後には会を退会するものが続出することにも現れている。一方、子どもは障害を一生抱えながら生活するわけであり、就学以降も思春期にやってくる精神的な混乱期、職業の選択という大きな問題が子どもを待ちうけている。このように、聴覚障害児自身がまだ言語未獲得の間は、親もその問題に対して積極的に関わることが、一旦、子供が周囲の子供と遜色ない程度に言葉を獲得してしまうと、障害児に対する親の認識が著しく低下してしまうのを目の当たりにしてきた経緯がある。

以上より、申請者らは、長期的な視点に立って障害児を抱える親の生涯教育が必要であると考えている。この問題の対策として、申請者らは幼児期から父親に訓練への参加を積極的に促すことなどを試みている。その結果就学以降も親の積極的な患者会への参加を認めている。これを石川県全域に広げるには、患者会の活動を支援する人材育成も必要と考え、本研究を提案した。

金沢大学医薬保健研究域保健学系

* 国際医療福祉大学保健医療学部

** 京都学園大学健康医療学部

*** 金沢大学医薬保健研究域保健学系

平成26年度の活動計画

平成26年度は、まず聴覚障害に対する基本的な知識のうち耳の構造・機能と人工内耳について当大学保健学類の学生に学んでもらう。次に、聴覚障害児を抱える親子に大学に来てもらい、学生達と交流を行う。さらに、能登・金沢・南加賀地区で、聴覚障害児を育てた先輩に訓練中のビデオを編集して供覧し、先輩の親自身が回想しやすい情報を提供しながら自らの体験談を語ってもらう。体験談を後輩の親たちに聞いてもらい、悩みを共有できるようにする。このような人的資源を後輩の親へ伝えるという活動を学生自身にも体験してもらうことによって、「聞こえ」の障害の難しさを、聴覚障害児者自身、聴覚障害児を持つ親、参加した学生とが共有できるようにする。

申請者は40年に亘り、金沢方式という聴覚障害児に正しい日本語を獲得させる方法⁴⁶⁾を指導し、NPO金沢方式研究会という患者会と共に広めている。したがって、先輩親はわが子が30歳代、40歳代の親もいる。このような人的資源を活用して、「聴覚障害」に伴って生じる問題には、言葉の習得の困難さに加えて、聴覚障害者の社会性の低さや人格形成などの問題があること⁷⁾を後輩の親へ伝えており、学生達にも理解させる。そして、学生自身に社会の中で自分は何ができるかを考えさせるとした。

活動報告

平成26年度は上記のような計画を立案したので、以下報告をする。

- 平成27年1月17日に七尾にて、幼児期に大学病院にて訓練を受けていて、現在普通小学校に在学中(小学3年生と小学6年の重度聴覚障害児)の子を持つ母親2組のインタビューを行った。インタビューの際には、幼児期の母親による記録やDVDを見せ、当時のことを語ってもらうという回想法を採用した。母親はDVDや記録があるおかげで、子供が幼児期の頃を思い出しやすいかったとのことであった。2組とも奥能登在住で、幼児期は毎週金沢まで片道2時間以上自家用車で通院した。母親達は子供の体調が良くない時は外来を休んだが、金沢と離れているので不安があったと話していた。また母親自身は通院に疲れを感じることがあったと語ってくれた。
- 次に、聴覚障害の医学的知識の提供を目的に、平成27年1月27日保健学類において、金沢大学病院耳鼻咽喉科の杉本寿史先生による講演会を開催した。テーマは耳の構造・機能と人工内耳などの最近の話題である。当日は保健学類学生や教員の他、一般からも

参加があり計48名の参加があった。参加した保健学類の学生のうち、作業療法専攻の3年22名に講演で得た知識と感想を自由記載でレポートを提出させた。レポート提出を求めた全員から回収できた。学生の感想文には、人工内耳には手術が必要であり、さらに術後リハビリテーションも重要であることや、難聴の遺伝子診断について知ったことが良かったと書かれてあった。感想を表1にまとめた。

表1 耳鼻科医による聴覚に関する講演会の感想(抜粋)

- 補聴器だけでなく、人工内耳という聾の人も軽度難聴にまで改善させる機器があることを知って良かった。
- 人工内耳は手術が必要であるが、ただ手術をして機器を埋め込むだけではなく、その後のリハビリテーションが重要だということを学んだ。
- 難聴の遺伝子診断が進んでいることを知ることができて良かった。
- 今回の講演からいろいろ学ぶことができて、将来、自分の子供が難聴と言われても安心した。

- さらに、平成27年1月23日と30日の2回に亘り、現在大学病院耳鼻咽喉科外来で言語訓練中の聴覚障害児とその母親3組(2歳児、3歳児、5歳児で高度から重度聴覚障害児)を学内に招き、作業療法専攻3年生の学生22名との交流を図った。2歳児と5歳児は補聴器両耳装用、3歳児は人工内耳片耳装用である。2歳児はまだ手話による表出が中心である。学生達は手話ができないので、母親が通訳していた。我々が行っている聴覚障害児に対する言語指導は、金沢方式と呼ばれ、0歳代から補聴器を装用して、親子のコミュニケーションは手話を用いる。しかし、金沢方式の考え方では、手話は話し言葉を子供が獲得するまでの橋渡しのコミュニケーション手段として利用しているので、3歳児と5歳児のコミュニケーションはすでに手話ではなく、学生達と同様の話し言葉である。この子供達の会話力に学生達が皆一様に驚いていたことが印象的である。学生達が持っている聴覚障害児のイメージは前時代的な部分もあり、今回の機会はそれを払拭する良い機会となった。交流会後に22名の学生に聴覚障害児とその親との関わりについて自由記載でレポートを提出させた。レポートは全員から回収できた。レポートには聴覚障害児が話せることへの驚きや、聴覚障害と診断された後の親の不安、また親が聴覚障害に対する知識を得て、具体的な指導を受けることによって不安が減っていく過程を経ることに気づいたことなどが記載されていた。レポートの一部を表2に掲載した。

表2 聴覚障害児との交流後の学生達の感想(抜粋)

- 3歳児も5歳児も高度～重度難聴と聞いていたが、普通の幼児のようにお話していて驚いた。
- 「不治の病」と思っていた聴覚障害に対して全く考えが変わった。
- どの親も最初は聴覚障害と診断され、不安が強かったとのことであったが、聴覚障害に対する知識を得て、具体的な指導を受けることで、不安が改善するという過程を経ることに気づいた。
- 毎日、親が子供と生活する中で指導や訓練ができると言う親の言葉が印象に残った。

今後の展開

平成26年度の事業は全て完成できなかった。しかし、学生は話せる＝聴こえると判断しており、会話が可能であっても聴覚障害者は雑音下では聞き取りが低下し、そのために誤解を生じること等を学生達が知識として持っていないことも講義を通じてわかった。聴こえの問題は、高音域の聴力が悪くなる中年以上の人には、誰もが当てはまる問題である。したがって、本研究の結果は、一般社会の「知」のレベルを高めるために貢献することに繋がり、能登、金沢、南加賀の「地」において、小児の問題にとどまらず、熟年層以降の問題として大学を拠点に発信できる課題でもある。

訓練のために大学病院まで奥能登や南加賀地区から毎週車での移動は片道2時間以上かかる方もいる。若い親であっても、毎週のように幼い子供を車に乗せての移動は、身体的な負担のみならず、注意力などにも影響することはすでに知られているので、保健学系の教員とチームを組みながら今後さらに検討を進めて行きたいと考えている。COC事業の展開としてさらに平成27年度にも続行予定で申請中である。

文献

- 1) Hashimoto K, Notoya M, Harada H, et al :Long-term language abilities of subjects with hearing impaired trained by the written-oral language method, J Tsuruma Health Sci Soc, Kanazawa University 38: 1-10, 2014
- 2) 橋本かほる, 能登谷晶子, 原田浩美, 他: 新生児聴覚スクリーニング後の療育支援の必要性について, Audiology Japan 58: 143-150, 2015
- 3) 原田浩美, 能登谷晶子, 橋本かほる, 他: 聴覚障害幼児を持つ親への支援プログラムの開発—親へのインタビュー結果から—, 第9回日本小児耳鼻咽喉科学会(抄録), 2014
- 4) 能登谷晶子, 鈴木重忠: 難聴幼児の言語発達と文字言語の役割, 音声言語医学25: 140-146, 1984
- 5) 鈴木重忠, 能登谷晶子: 聴覚障害児の言語指導—金沢方式をかえりみて—, 音声言語医学34: 257-263, 1993
- 6) 能登谷晶子, 伊藤真人, 古川徂: 0歳代で訓練を開始できた高度聴覚障害幼児の言語獲得経過, 金沢大つるま保健会誌26: 75-79, 2002
- 7) 中村公枝: 第1章聴覚と聴覚障害, 標準言語聴覚障害学—聴覚障害学—(中村公枝, 城間将江, 鈴木恵子編), 医学書院, pp 10-11, 2010

**Aim at human resources development through hearing disorders with the various complex problems
— Center of Community work report of Kanazawa University in 2014 —**

Masako Notoya, Hiromi Harada*, Kahoru Hashimoto**, Nobuyuki Sunahara***, Masami Yokogawa***